



小島 博明

龍馬暗殺の謎・黒幕は誰だ？土佐藩犯人説への考察（下）

「私論として」

私のテーマ

暗殺2日前からの動き

後藤象二郎は、福岡孝弟らに「やがて坂本君も越前より帰京するが、賠償金を受領したと商会より連絡があるまで坂本君を長崎に行かさないように」と念を押した。

福岡は龍馬の旅宿「近江屋」の隣家の酒屋に下宿していた事も有り、良策を持っていた。

京都にはその当時、京都町奉行所と新たに加わった「新選組」と「見廻組」の三つの警察組織があり、その中で京都町奉行を務め若年寄でもあった永井尚志とは昵懇の仲であった。つい先にも宮川助五郎（前年の9月には三条大橋西詰の高札場の高札を鴨川に投げ捨てた罪で入牢中）を、そろそろ引き取ってくれぬか、との話があったのだ。福岡は越前から帰った龍馬を何度か永井の屋敷に連れて行き龍馬の警戒心を解いていた。

11月13日、龍馬は遂に行動を起す。「紀州藩が言を左右にして賠償金を支払わないので岡内俊太郎を土佐へ中島作太郎を長崎に派遣し督促に行かせる」。また「自分も数日後には坂本清次郎（兄権平の一人娘・春猪の婚養子）と長崎に行く」と言う。

福岡は覚悟を決める。土佐藩の為だ。14



龍馬「近江屋」に散る＝カット画・和田通博

この日神山佐多衛と福岡藤次は薩摩の田中幸助（アリバイ工作か？）と祇園に遊び、寺村左膳は四条大橋東詰にて芝居見物に行っていたようで、宿に帰って初めて坂本龍馬の旅宿「近江屋」が襲撃され坂本龍馬は即死、中岡慎太郎と若党の

日に龍馬の長崎行を阻止する為、「永井殿より指示あり次第、京都町奉行所に行き宮川助五郎を受け取ってくる様に」と命令を下した。長崎「土佐商会」の役人であった。

（池道之助の日記によると紀州より11月4日に三千両、12日にも賠償金と思われる多額の金を受け取っているが、この報告は今だ届いてはいなかったのだろう。）

15日神山佐多衛は部下に命じ秘かに宮川助五郎を奉行所より受け出し河原町の土佐屋敷の内牢に入れた。龍馬が奉行所に行くのと、その場で捕縛するとの策略であった。

龍馬暗殺の日

慶応3年11月15日（西暦1867年12月10日）その日は朝から冷たい雨が降り寒さ厳しい日であったと言う。

この日神山佐多衛と福岡藤次は薩摩の田中幸助（アリバイ工作か？）と祇園に遊び、寺村左膳は四条大橋東詰にて芝居見物に行っていたようで、宿に帰って初めて坂本龍馬の旅宿「近江屋」が襲撃され坂本龍馬は即死、中岡慎太郎と若党の

山田藤吉が虫の息だと知らされた。この時、福岡は龍馬の在宅を確かめに来た刺客の一人（桂隼之助）が自分の宿にも訪ねて来たこと従者の和田に聞き、顔面蒼白となり宿に籠り考え込んでしまった。

後に福岡孝弟子爵夫人となるおかよは不審に思い「龍馬さん等の御見送りに行かないのですか？」と尋ねると、普段物静かな福岡が「貴様などの知った事ではない！」と一喝したと言う。よほどのショックだった様だ。

奉行所に捕縛されているはずが、宿である「近江屋」で暗殺されたのだ。やはり「新選組」の仕業か？それとも永井尚志の手の者か？まさか…。

虫の息だった藤吉は16日に、慎太郎は17日に息を引き取ったと言う。坂本龍馬は33才の誕生日であった。慎太郎は30才、藤吉は19才の若さであったと言う。龍馬は全身に34ヶ所、慎太郎は28ヶ所、藤吉は7ヶ所の刀傷があったと言う。

暗殺の真犯人と黒幕は？

明治になって元「見廻組」隊士、今井信郎と渡辺篤の証言により、実行犯は判明した。渡辺篤の話では、龍馬を切ったのは自分であり、慎太郎は今井信郎が、藤吉は世良俊三が切ったとし（この時、刀の鞘を落とす）、今井信郎は、桂隼之助と渡辺安太郎が階上で襲撃に加わり、高橋安次郎、土肥作蔵と桜井大三郎が階下で見張り役をしていたと言う。「見廻組」で頭、佐々木唯三郎が検分役として立合ったそうだが、今井信郎と渡辺篤の他は、鳥羽伏見の戦いで戦死している。又、渡辺篤の坂本龍馬を切った脇差は「京都見廻組」総頭、信州飯田藩主、堀石見守親広より拝領の会津藩工、大和守秀国、一尺余であったと言ひ、褒美として十人扶持が家禄に加えられたと証言している。とすると京都の警察組織の一つである「見廻組」単独の犯行となり、いわゆる政治的な黒幕は存在しない事になる。

又、後藤象二郎は、11月3日付で容堂公より「大政奉還」の成立による論功行賞として、馬廻役の家格が御中老に昇格し、百五十石の家禄が千五百石に増加され、破格の大出世を遂げた。同月、象二郎の手にて岩崎弥太郎も父弥次郎の代で地下浪人であった家格が留守居組（上士）に昇格し、「土佐商会」副主任となった。薩摩の五代才助には立合料として、過分の二千両が支払われた。

——（上）（下）と書いたこれらの内容はあくまでも私個人の考察です。皆様はどう思われますか？また、（上）でのイカルス号事件における山内容堂とパークスの件については、5月の現代龍馬学会で発表された今井章博氏の「大町桂月の「伯爵後藤象二郎」余話」から引用させていただきました。

が惚れる男”

アに

造形作家 藤原豊さん



藤原豊さんの作るフィギュア（キャラクター人形）は細部まで丁寧に作っている。人物は実際の身長を検証して、8分の1サイズとする。そのため、坂本龍馬、中岡慎太郎、武市半平太、勝海舟、西郷隆盛らの身長差は歴然だ。その上、それぞれの人語りかけてくるような表情をしている。

中でも龍馬が面白い。立ったり座ったりという写真のポーズだけでなく、笑っている龍馬もいて、実に生き生きとしている。

さほど入念なフィギュア作品は、すべて独学の趣味で作ったものだという。「記念館に置いてもらえるだけでうれしいんです」と笑う藤原さん。なんと本業は会社員で、仕事を終えてからの時間、コツコツ製作しているという。

記念館二階にある11体のフィギュアを入れたケースの前では、じっと見つめたり、写真を撮ったりする人の姿があとを絶たない。多くの人が藤原さんのフィギュアに魅せられている。

夏休みの終わり。汗を拭きながら記念館を訪ねてくれた藤原さんに、龍馬への思いなど聞いてみた。

二十歳の誕生日プレゼントに「竜馬がゆく」

外は暑かったでしょう。はるばる西宮からお越しいただき、ご苦労さまです。藤原さんは「本当に龍馬が好き」というオーラが出ていますが、龍馬との出会いなどお聞きしたいです。

まず、私は坂本龍馬と同じ11月生まれです（笑）。神戸生まれという点もあって、龍馬も慕った楠正成公、まあ、神戸っ子にとっては楠公さんですね。その楠公さんゆかりの湊川にある「楠幼稚園」に通っていました。小学校でも楠公さんのことは勉強しますしね。また、僕にも乙女姉さんと同じように3歳違いの姉がいます。

それよりも何よりも、僕の二十歳の誕生日に、会社の先輩が司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」文庫八巻をプレゼントしてくれましたね。それまでは戦国時代と幕末がごっちゃだったくらいですけど、一気に読みました。龍馬に仕上げましたね。

何しろ、2カ月後の翌年（1989年）1月15日の成人式には高知の桂浜にきていましたからね（笑）。高知駅前では龍馬記念館建設のための募金活動も



して、僕も寄付しました。この年だけでも高知には3回来ました。

司馬作品もほとんど読んで、司馬ファンにもなりました。

龍馬は男の理想像

それはすごいですね。龍馬のどこに惹かれたんですか。

「竜馬がゆく」は面白いのですが、僕には時代背景が分からなかった。だから本はたくさん読みましたね。自宅自室の壁一面の本棚は龍馬関係の本で埋まっています。

とにかく龍馬は器がでかいですよ。

それに、僕にないものを持っている。女や老人にやさしい。姉さんに甘えることもできる。佐々木高行が言うた「坂本は目的を定めたら、どんな手段を使ってもやり遂げた」というこ

とですね。僕はできません（笑）。龍馬の手紙はメチャクチャ好きです。何度も何度も読みました。話し方のうまさや人間臭さが伝わってきます。自分が迷っているときなど、龍馬が「こっちはや」と言うてくれるみたいです。

つまり、龍馬は自分が理想とする男性に当てはまるものばかりなんです。男としての理想像ですね。

男が惚れる男ということですね。分かる気がします。

そんな藤原さんが龍馬たちのフィギュアを作ることになったのはどういったきっかけなんだろう。どこかで学んだのですか。

僕はもともと趣味でプラモデルを作っていました。「竜馬がゆく」を読んだ2年後くらいから、徐々にフィギュアを作り始めたんです。

フィギュアの原点は二十歳のとき、高知に初めて来たときに買った龍馬像なんです。店で売ってた中で一番大きな像で、30年近く前に一万二千円くらいでした。けっこう高かったなあ（笑）。今でも自分の部屋の一番いい所に飾っています。制作はすべて独学です。工具

龍馬は“男” 龍馬の心をフィギュア



もデザインナイフだけでなく耳かきや爪楊枝を使うなど、自分なりの工夫をして作っています。

龍馬の心情に向き合うフィギュアづくり

—— フィギュアづくりを楽しんでいらっしゃるようですね。本業は会社員だとお聞きしましたが。

そうですね。本業は電子機器メーカーの営業マン、つまり会社員です。仕事が終わって家に帰ってから、夜コツコツと趣味で作っています。何とかな、自分や龍馬と向き合う時間というのかな。楽しいですよ。

初めは立位の写真を見ながら作り始めましたが、これだけでは立体的な龍馬は分かりません。昭和63(1988)年だったか、縁台に座る龍馬の写真が見つかりましたね。そのおかげで、耳の形がはっきり分かりました。

平面から立体を作る過程では、文献を読んで性格付けをしていきます。

ただ、文献をなぞるだけでは表情は生まれません。想像力も重要ですね。

縁台に座っている龍馬の羽織はピシッと決まっています。やはり福井に訪ねたときかなと考える。寺田屋で襲われた後、手に傷があるのに、ブーツをわざと

見せている。そこに龍馬の性格を考えます。

龍馬に限らないかもしれませんが、武士は命の使い方が今とは違う。私のために使わないう。公に使うことこそ美しく深いと思っている。そんな龍馬の心情がフィギュアに反映できればうれしいですね。

龍馬と関わり続けたい

—— いろいろな思いと努力で作ったフィギュアを記念館に寄贈される。その心意気って何なんですか。

2年前の2014年。私は記念館に「私のフィギュアを記念館の片隅にでも置いてもらえませんか」とメールを送りました。

すると、森健志郎・前館長から「ぜひやろう！」と返信をいただきました。嬉しくて、飛んできました。西宮から車で4時間くらいですからね。

フィギュアは僕の内面にあるものを形にしています。自分の手によって龍馬の新しい面が出てくる。それをやはり龍馬を知り方たちに見ていただく。実は恥ずかしくもあり、嬉しくもあ



る。自己満足と思われるかもしれませんが、龍馬と少しでも関わりたいという気持ちもあります。

—— こちらまで嬉しく弾んでくるような動機ですね。龍馬の心情をつかむことが、フィギュアの形を作るうえで大事なんですね。

そうですね。龍馬って臨機応変というか、道は一本だけじゃないということも教えてくれるけど、目的がぶれない生き方をしている。今でも仕事が終わって1、2時間は本を読み直して、龍馬の生き方を考えています。

僕は五十歳近くになりましたが、いまだに超えることは無理です。そんな、めっちゃやでかい男、根性が座った男を相手にするなんて、たちが悪いんです(笑)。自分が困ったとき、悩んだときに、龍馬は現れて「ぶんと屁のなるほどやってみよ」なんて言う。男として一番カッコいいじゃないですか。

確かにね。だけど、藤原さんのフィギュアを記念館で見て、影響を受ける人もいますよね。紙の魔術師といわれるペーパーアーティスト太田隆司さんもその一人。幕末の人たちの身長差を初めて知ったとも

言っていました。それにしても、フィギュアの表情やしぐさ、雰囲気は藤原さんと似ていますね。キーワードは「カッコいい男」(笑)。

そんなに言われると照れくさいなあ。でも素直に嬉しいですね。人生の半分以上龍馬とつき合ってきましたからね。

今、記念館に展示していただいている龍馬、慎太郎、武市西郷、勝、慶喜公、高杉、土方は実際の身長を調べて、すべて8分の1スケールで作っています。僕のそんなこだわりがアーティスト太田さんの目に留まり役に立ったというなら、これからも地道に作り続けて行く力になりますね。

話が終わり、席を立った藤原さん。長身の後ろ姿に龍馬が重なった。

藤原豊(ふじわら・ゆたか)

造形作家、会社員。

JAPANミリアルフォーラム会員。

1968年兵庫県神戸市生まれ、西宮市在住。20歳のとき「龍馬がゆく」(司馬遼太郎)を読んでからの龍馬ファン。趣味のプラモデル作りからフィギュア製作に移り、龍馬フィギュアなどをコツコツ製作してきた。2014年から記念館に作品を寄贈。その作品は、ペーパーアーティスト太田隆司さんにも影響を与えている。



前田 由紀枝

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸課長

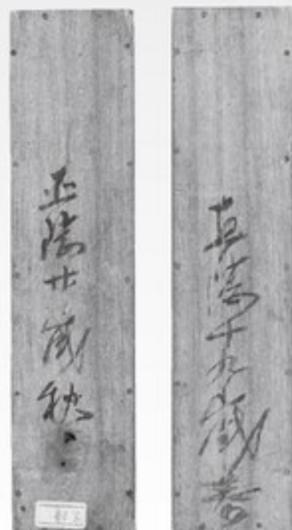
「父親のよろこび」

宮川 禎一

京都国立博物館で坂本龍馬関係資料を扱う者として龍馬資料の隅々まで知っていたつもりだったが、恥ずかしながらごく最近になって判ったことがある。

それは日根野弁治が発行した「小栗流和兵法目録」(嘉永6年3月)および「小栗流十二箇条并二十五箇条」(嘉永七年閏七月)(いずれも重要文化財。この二巻の間は龍馬の第一次江戸修行中)の巻物を納めた木箱のことである。これまで中身の巻物のことばかり気にしていたが、実は箱の裏側、底面に墨書があることに今年になってやっと気付いたのだ。それが結構重要な記載であった。蓋の表の題字は日根野弁治先生の文字であろう。しかしその裏側の文字の書風は表とは全く異なる。その記載とは前者が「直陰十九歳春」(写真①)後者が「直陰廿歳秋」(写真②)というものである。(直陰は龍馬の本名、のちに直柔と改称)こんな書き方をす

るのは日根野弁治先生でもなく、龍馬本人でもなく、乙女姉さんでもなく、父親の坂本八平以外には考えられないことだ。その大胆奔放な文字の雰囲気も「修行中心得大意」に似ているようだ。すなわちこの巻物の箱裏に龍馬の年齢を書き入れたのは父八平であって、龍馬が通っていた剣術道場の先生からこの木箱入の巻物をもらって来た際に龍馬の年齢季節を箱の裏側に墨で書いたのだ。わが子の成長を喜んだ様子をこの書付に観取することが出来る。坂本八平が亡くなったのは後者の目録をもらった翌年の安政2年12月のことであった。八平は幕末における龍馬の大活躍を知らないが、息子の剣術の上達を父親として素直に嬉しく思っていたことをこんな形で後世の私たちに知らせてくれたのである。



写真②

写真①

コラム・龍馬のこと

「九反田開成館」

九反田開成館をもっと知ろう会 会長 井倉 俊一郎

150年前土佐が日本国でトップランナーだった頃、慶応2(1866)年2月高知城東九反田に土佐藩の総合商社開成館が設立された。

慶応2-3年この2年あまりの期間、九反田開成館に所属しながら土佐国(藩)の土佐人が幕藩体制の終焉を武力革命でなくしたことはなぜか。安政元年(1854)容堂、象二郎はいちはやく万次郎により海外情勢を知り、富国強兵に備え海外貿易の拠点(開成館)を構築していた。また同時期龍馬も河田小龍から万次郎の海外事情のレクチャーを受けていたことで、国防の必要性を理解していた。彌太郎も江戸留学と吉田東洋から教えを乞うた少林塾で、海外との貿易の必要性は感じていただろう。

慶応2年(1866)龍馬は他国(外藩)との折衝に奔走していたその情報を踏まえ長崎清風亭会談後 象二郎と龍馬は車の両輪となり、海援隊隊長坂本龍馬が「船中八策」を起草、それを参政後藤象二郎が土佐藩主山内容堂に上申、老中より政夷大將軍徳川慶喜に提出され二条城にて大政奉還の勅使がなされた。大政奉還後、開成館収支決算は多額の借入金、その後始末は貸殖局主任彌太郎にまかせられる。彌太郎はそれをチャンスとしてとらえ九十九商會を発足させ今の巨大企業三菱を創設していく。

先人の歴史が在り、今が在る。先人の歴史を知らずして未来は語れない。さて今の高知県 150年前から優秀な若者は江戸(首都圏)へ出て行ってしまい、高知はまっこと人材不足。前回の選挙は合区で土佐は阿波に吸収合併されたようなもの。私は今一度輝かし栄光の1866年九反田開成館時代を検証することが、高知県産業振興のヒントになると考えますが、皆さんどう思います。

“話してみるかよ”

「一宮幼稚園版・坂本龍馬検定」

一宮幼稚園長 宮 英司

幼稚園内に坂本龍馬コーナーをつくっている。

龍馬の写真、人形、新政府綱領八策の額、全国の龍馬像MAP、龍馬の年表等々…。中学校に勤務していた時にもこれほどのスペースはつくれなかったもので、本園の子どもたちは恐らく全国の幼稚園児の中でも突出した「龍馬情報享受幼稚園児」ということになる。

それに飽き足らず、「幼稚園版・坂本龍馬検定」を始めた。①龍馬の誕生日は?②龍馬は何人きょうだいの何番目だった?③お兄さんは何人いた?④お姉さんは何人いましたか?⑤龍馬のすぐ上の姉さんの名前は?⑥龍馬の奥さんの名前は?⑦龍馬が仲間と一緒にきたかった所は?⑧日本で初めての新婚旅行の行先は?⑨龍馬のお墓はどこにありますか?⑩龍馬が亡くなった日はいつでしたか?……である。

これが子どもたちに大ウケで、11月はまさに龍馬月間となる。そして年長には「坂本龍馬カード」、年中には「坂本龍馬がんばり賞」を贈呈して、次年度のパワーアップを目指すこととなる。

私は常々残念に思っている。高知の子どもたちは驚くほど龍馬のことを知らない。教科書でも扱いは簡単である。もっと、子どもたちが龍馬のことに触れる機会をつくってやりたい。それが高知で生きている値打ちだと思う。子どもたちが、龍馬のことを忘れたとしても、小学校の授業で再び龍馬に出逢った時にきっと幼稚園の龍馬コーナーを思い出してくれることだろう。また、こうした基礎知識は、子どもたちが成人したのちにきっと役に立つ。

将来、子どもたちが県外で生活を始めた時に「さすがは高知の方ですね。龍馬のことも詳しいですね。」と言ってもらいたい。そういう子どもたち(大人)を育てていきたいと願っている。